ふる～ぶ恒例 春の野草をいただきます

「さむいっ。外に出るのもいやだ」なんて、思っていた冬が、終わりを告げると、吉野川にも春がやってきます。冬の間は、空も川面も、灰色や鉛色で、凍えていた吉野川。

それが、笑顔がほころんだようになる春。空も川面も明るい青に。あまり色のなかった堤防も、やわらかい緑色となり、菜の花や、タンポポも咲き、明るい色があふれるようになります。

この時期に、芽をだすやわらかい野草たち。ヨモギや、ノビルたち。ふる～ぶめいとのみなさんを講師に行う野草料理教室は、毎年の恒例行事となりました。さて、今回は、どんなメニューが飛び出すでしょうか？春の吉野川レストランが開店します。

『野草つみ・野草料理教室』リハーサル

今年の『野草つみ・野草料理教室』は、3月5日（日）。でも、それまでには、メニュー開発、イベントのリハーサル、ミーティングなど、長い道のりがありました。今回の野草メニューは、前回に続いて、ふる～ぶめいと 黒川さんが、子どもたちにも、日常の食生活の延長で、野草を楽しんでもらいたいと、考えたものです。

今回リハーサルが行われたのは、2月12日（日）、天気予報は、晴れだったものの、寒さにふるえる1日となりました。冷たい風にふるえながら、少しずつ花をつけはじめたカラシナ、やわらかいヨモギの若葉、土のなかから、でてきた真っ白いノビルの球根を採り、毎年のことながら、吉野川の春の恵みのおすそわけをいただきました。

「班分けは？」「食器は？」「全体の流れは、どうする？」「もう少し量を多くしては？」調理をしながらも、さまざまな意見が飛び交います。完成した料理を食べながら、それらの内容をミーティング。役割分担や、持ってくるものなどの話し合いをしました。

カラシナ

ノビル

野草レシピ　4～5人分

野草パン（ヨモギ他）12個分

野草レシピ

材料

強力粉280ｇ、卵（Mサイズ）1/2個、牛乳140ml、砂糖大さじ2、塩小さじ1、バター40ｇ、粉乳（スキムミルク）大さじ1、ドライイースト小さじ2、野草（ヨモギ、カラスのエンドウなど）15ｇ

作り方

①生地づくり、ホームベーカリーを使って、生地づくりに設定、材料を入れ、一次発酵まで完了する。
②生地を取り出し、スケッパーで、12等分する。
③12等分した生地を丸めて台の上に置き、約10分休ませる。（ベンチタイム）
④用意したアルミ皿に入れ、オーブン皿に並べ、表面が乾かないように霧ふきをして、32～35℃に保ったオーブンで30分から40分発酵させる。（二次発酵）
⑤2～2.5倍に、ふくらんだら、180℃に予熱したオーブンで15分焼く。
⑥焼き上がったら、あみの上に置き、冷ます。

カラシナとノビルのシチュー

野草レシピ

材料

シチュールウ100g、牛・豚合挽きミンチ 250ｇ、冷凍コーン50ｇ、タマネギ中2個、じゃがいも中2個、にんじん1本、カラシナ・ノビル合計50ｇ、サラダ油大さじ1、水 600cc、牛乳100cc、ビーフコンソメ（普通のコンソメでも代用可）2.4ｇ×2本、塩・コショウ少々、揚げ油適量、卵1個、小麦粉25ｇ

作り方

①合い挽き肉に、カラシナとノビルの刻んだもの、卵、小麦粉、ビーフコンソメ2本と、塩、コショウを混ぜ合わせ、小さい団子状にする。
②揚げ油で、①をこんがりと揚げる。
③厚手の鍋に、サラダ油を熱し、一口大に切った野菜、冷凍コーンを炒める。
④水を加え、沸騰したら、あくを取り、ビーフコンソメ2本と、塩、コショウで味をととのえ、材料がやわらかくなるまで、中火で煮込む。
⑤火を弱火にし、ルウを加え、溶かし、とろみがついたら、牛乳を加え、①を加える。

ノビルのパスタ、サラダ風

野草レシピ

材料

パスタ500ｇ、レタスまたはサラダ菜適量、山芋(なくてもいい)、マヨネーズ適量、マスタード適量、塩適量、ノビル30ｇ

作り方

①沸騰した鍋に、塩(適量、または、好みで)を入れ、パスタを茹でる。(アルデンテ)
②①をボールにとり、マヨネーズと、マスタードで、あえ、小さく刻んだノビルをからませる。
③皿にレタス、又は、サラダ菜を敷き、②を盛り、短冊状の山芋を飾る。

タンポポゼリー

野草レシピ

材料

ゼラチンリーフ(顆粒のものでも代用可)15ｇ、砂糖100g、レモネード(顆粒)60ｇ、クエン酸少々(家庭でする時は、なくてもいい)、タンポポ、ミント(適量)、水600CC

作り方

①リーフは、水を入れ、やわらかくする。
②500ccの水をわかし、①と40ccの水でミキシングした、タンポポとミント、砂糖、レモネード、クエン酸を加え、かき混ぜる。
③大きめのボールに水を張り、さます。
④冷めたものを目の細かいふるい等でこす。小さめのカップに注ぎ、冷蔵庫で、1時間ほど冷やす。

野草茶

材料

麦茶、ヨモギ適量

作り方

沸かした麦茶に水洗いした、適量のヨモギを加える。好みで、ミント加えると、飲みやすい。

3月5日(日)
快晴

春爛漫を思わせるぽかぽか陽気のなか、総勢33名が参加して、『野草つみ・野草料理教室』が開催されました。

参加者のみなさんは、野草を摘んだり、野草料理を作ったりするのが、初めての方がほとんど。河原にでかけての野草摘みでは、咲き始めたカラシナの黄色い花に表情をほころばせながら、実際にそのつぼみを摘んだり、土を掘るとでてくる白い小さなノビルの球根を興味深く眺めていました。

その後、3班に分かれて、全員で調理。さまざまな方と、触れあっていただく為、参加していただいた親子の皆さんは、別の班にしていましたが、全員で和気あいあい和やかな雰囲気のなか、協力しあいながら、調理は進みました。

子どもたちも、積極的に参加し、どの班も手際よく調理が進められたので、1時間ほどで、調理は終了。出来上がった料理を食べた参加者の皆さんは、「野草がこんなにおいしいとは知らなかった」「幸せな気分になった」「いろんな方と、コミニュケーションがとれたのは、楽しかった」など、大好評のうちに終了しました。皆さんお疲れ様でした。

ふる～ぶめいとの皆さんの大きな力で始まったこのイベントからは、今回ご紹介した以外にも、たくさんの野草料理レシピがうまれました。

吉野川レストラン

- ★よもぎダンゴ
- ★よもぎご飯
- ★カラシナとノビルの酢みそあえ
- ★タンポポ料理
- ★よもぎの豆乳スープ
- ★野草のチキンロール
- ★野草スパゲティ
- ★よもぎパンと野草ピザ
- ★ノビルギョーザ
- ★よもぎのパンケーキ
- ★よもぎの白玉お吸い物
- ★野草チャーハン
- ★野草シフォンケーキ
- ★納豆サラダ
- ★ホワイトスープ

これらのレシピは、国土交通省徳島河川国道事務所吉野川資料館より、ふる～ぶ情報広場の、吉野川レストランでご覧になれます。吉野川資料館へは

http://www.toku-mlit.go.jp/river/frame.html

ぜひ、吉野川の春の魅力を感じてみてくださいね。また、みなさんのとっておきのレシピを教えてくださいね。

吉野川アラカルト

La Yoshino est le plus long fleuve de Tokushima.

吉野川だけでなく、流域の町、自然、人々、それぞれに特徴があります。

こんなに広い吉野川。いろいろな話題があるはず。毎月私たちは、出会い、発見を求めて町に飛び出します。
さて今回は、『**吉野川と橋**』。吉野川には橋の博覧会ができるくらいたくさんの橋がかかっています。
橋にまつわるエピソードと旧穴吹橋の歴史についてお伝えします。

現在徳島県内の吉野川にかかっている橋は、**45本**
（工事中を含めて）抜水橋が**34橋**（高速道路2橋、国道・県道23橋、自転車歩行者道5橋、JRに4橋）
また潜水橋として**11橋**かかっています。

潜水橋……洪水時には増水した水中に潜ってしまいますが、水が引くと水上に出てくる橋。
抜水橋……洪水が来ても水の中に潜ることなく、路面が常に水面上に出ている橋のことをいいます。

潜水橋は、お隣の高知県では沈下橋と呼ばれています。抜水橋という言葉は、暴れ川吉野川が流れる徳島県ならではの言葉で、一般的にはあまり使われていないようです。また比較的安い費用で架けられる潜水橋は昭和29年頃から40年頃に県内で多く作られました。

橋が川面に近いことから、川の水に親しみを感じることができますが、増水時の交通の不便や転落事故の危険性もあり、経済の発展とともに、次々と抜水橋に架け替えられていきました。

三好橋　旧穴吹橋　吉野川橋

昭和3年に開通して以来、徳島のシンボル的な存在として今も人々の通勤・通学の主要なルートになり親しまれている。

吉野川に人も車も安全に通れる橋が完成したのは昭和2年。池田町の三好橋です。その翌年、旧穴吹橋と吉野川橋が架けられました。

三好橋は改修や補修を重ねながら、吊橋からアーチ橋へとその姿を変え、穴吹町と脇町を結んでいた旧穴吹橋は、町の発展に大きな役割を果たしながらも、老朽化に伴い、平成3年旧橋の約500m下流に今の穴吹橋が開通した後、撤去されました。

吉野川橋は、完成から70年以上たった今も、旧吉野川橋として人々に親しまれ、その美しい姿を見せてくれています。

いずれの橋も設計したのは、徳島県から委嘱を受けた増田淳氏です。橋梁の技術研究の為、明治41年アメリカに渡り、さまざまな設計事務所に勤務し、大正11年に帰国しました。帰国後、橋梁コンサルタント会社を東京都品川に設立しました。その会社の案内に増田氏が設計した橋が紹介されていますが、この3橋のことをこう記しています。

解体作業中の旧穴吹橋。平成5年2月に撮影されたもの（宮田礒二さん提供）みんなの思い出がつまった橋だった。

三好橋	両岸絶壁山紫水明なる地点に架せられたる一大吊橋なり。
穴吹橋	重要自動車路線中に架設せられ極めて不便なる渡しを廃し、交通の面目を一新せり。
吉野川橋	国道橋にして橋長1，071m に及び、関西地方に於ける最長橋梁の一つなり。

この短い文章だけでも、当時の橋の美しい姿や時代背景、人々の橋にかける思いが伝わってくるようです。

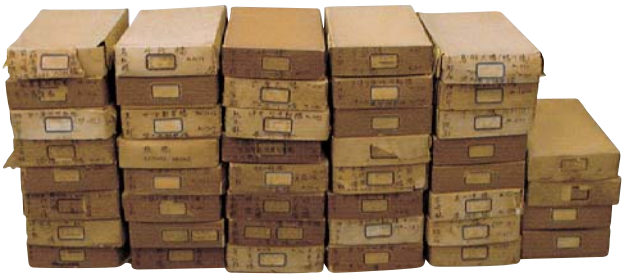
●参考文献　『とくしまの橋　四国三郎　吉野川の橋』　企画・編集　徳島橋梁技術者の会●

天才橋梁設計技術者
増田淳

増田淳は、東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業後、渡米。アメリカの設計事務所に就職しました。帰国後、橋梁の設計、監督を主な業務とするコンサルタント会社を設立。増田淳が手がけた代表的な橋は、信夫橋（福島県）千住大橋（東京都）、白髭橋（東京都）、伊勢大橋（三重県）、鳥羽大橋（京都府）、十三橋（大阪府）、武庫大橋（兵庫県）、吉野川橋（徳島県）、長濱大橋（愛媛県）など、全国各地に及んでいます。当時の交通は、鉄道が中心で、いわゆる官（行政）のなかに、設計技師がいて、直接鉄道橋の設計を担当していました。これをインハウスエンジニアといいます。

増田淳設計の那賀川橋。昭和3年に架けられた。空の青さに溶け込むようなやさしいブルーが美しい。

その後、都市が発達し、車の普及とともに、道路が整備されるようになると、道路橋の建設が不可欠となりました。当時、インハウスエンジニアのなかには、道路橋を設計できる人物がほとんどいなかった為、増田淳は、地方自治体の嘱託技師となり、多くの道路橋（一部鉄道橋併用）の設計をしたのです。



つくばの土木研究所で、発見された資料は、膨大な量になる。（写真提供土木研究所）

このように多くの橋を設計したにもかかわらず、現存する資料がとぼしかったことから、今まで脚光を浴びることがなかった増田淳。

茨城県つくば市の土木研究所。平成14年の秋に、増田淳の設計計算書や、設計図などが多数発見されました。このなかには、吉野川橋の設計図や、計算書も含まれています。発見された資料は、大きく分けて3種類の形で保管されていました。第1は、厚紙のファイルに閉じられた計算書で、77冊。第2に、ボール紙製の箱に納められた計算書、設計図の資料で、44箱。第3は、封筒に入れられた設計図で8袋。これらのなかには、計画だけで、実現しませんでしたが、片瀬―江ノ島空中電車（モノレール）や、上海高速地下鉄道の設計図も発見されました。増田淳の豊かな才能を伺い知ることができる貴重な資料です。

これらの資料を整理し、まとめていらっしゃるのが、土木研究所構造物研究グループ 福井次郎さん。一緒にさまざまな資料を見せていただきました。

荒川橋建設現場。増田淳は、前列右からふたり目。1929年2月。（写真提供.埼玉県）

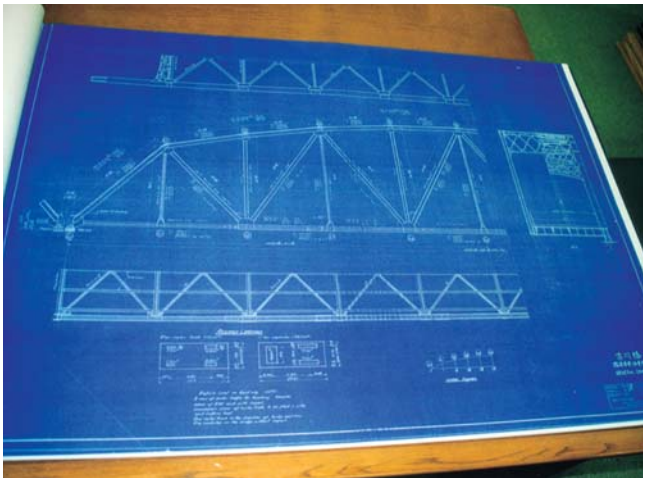
吉野川と橋PART3

天才橋梁設計技術者増田淳と吉野川

さまざまな設計図

吉野川のシンボル的な存在であり、今でも交通の要所として大切な橋。それが吉野川橋（古川橋）です。その設計図や、計算書を見せていただきました。

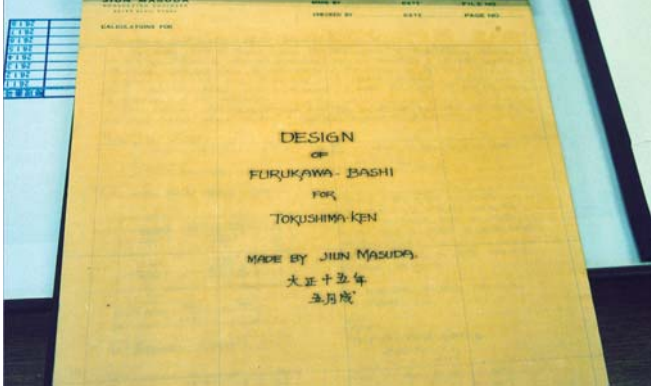
規則的に描かれたトラス。門外漢の私たちが見ても、額に入れて、飾っておきたい設計図です。すっと延びた線。太いところと、細いところ。ペンの力を入れ分けて、描かれています。福井さんによれば、増田淳の設計図は、土木を専門に研究している研究者の間でも美しいと、評判だそうです。



吉野川橋（古川橋）の設計図。美しく、白い線が並んでいる。

また、重厚な表紙の計算書を、ゆっくりとめくると、構造計算がびっしり。今のようにコンピューターのない時代です。まず、橋の設計をするためにかかせない構造計算も、手書きで行われていました。これらの設計図からは、繊細でこまやかでいながら、凛として、仕立てのよい真っ白のワイシャツのような輝きを感じることができました。

土木研究所での福井さんのお仕事は、橋を設計するためのもととなる基準づくり。まさに橋づくりのプロと言うべき福井さんに、増田淳が天才といわれる理由をうかがってみました。まず、設計した橋の数が多いこと、会社の活動が確認されている間に設計した橋は、約80橋。電卓もコンピューターもない当時の設計技術からすると、驚異的な数となります。また、その橋の種類が、ひとつの傾向にかたよることなく、トラス橋、桁橋、アーチ橋など多種多様にわたっていること、そして、設計図面が美しいことがあげられるそうです。



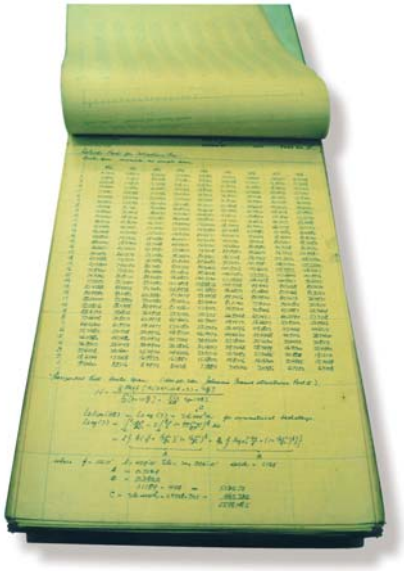
増田淳の重厚な設計書。黒い重厚な表紙を開けると、増田淳のサインがある。

福井さんは、国内に現存している橋を、すべて見られたそうですが、どの橋も、構造のみならず、デザイン的にも、優れていて、まわりの景色に調和し、地元の人々に親しまれている橋ばかりだそう。技術だけではなく、人々に愛された橋を作ったという点でも、まさに天才橋梁設計技術者といえそうです。

多くの資料は、このような箱に入れられていた。

大正から、昭和へ日本が大きな発展を遂げた時期に、すい星のごとく現れ、日本の土木史に大きな輝きを残した増田淳。

今後、どんなに時代が変わろうとも、増田淳が設計した橋は、いつまでも、いつまでも輝き続けることでしょう。



橋を設計するためには、まず構造計算。計算書には、手計算がびっしり。

あの日あのとき　吉野川　～昭和3年4月22日 旧穴吹橋開通～

宮田家の三世代渡り初め

この写真を提供していただいたのは、穴吹町にお住まいの宮田礒二（いそじ）さんです。宮田家は、もともと阿波郡市場町の善入寺島の出身で、吉野川第一期改修工事に伴い、島を離れました。この写真が撮られた頃、まだ礒二さんは生まれてはいませんでした。向かって一番左側が礒二さんのご両親で、お母様の政恵さんは当時お嫁にこられたばかりの22歳でした。現在もご健在でいらっしゃいます。

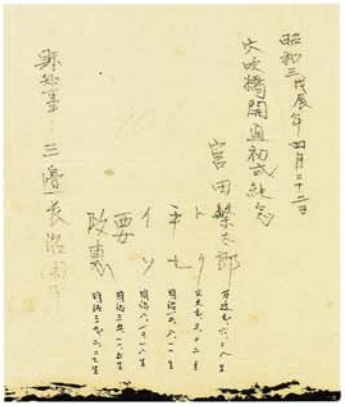
礒二さんが、折々にお父様から聞いた話によれば、当時は鉄道貨物が物流のほとんどをしめており、葉煙草や繭、農作物などたくさんの荷物を運びました。列車の止まる駅々はとてもにぎやかで個人で運送業を営んでいる店がたくさんありました。宮田家もそのひとつです。

●左から礒二さんの御両親、祖父母、県知事をはさんで曾祖父母。当時、県知事は今のように県民が選ぶのではなく、東京からやってきた官選知事でした。

旧穴吹橋の材料もまず神戸から小松島の港につき、積み替えをしながら、穴吹駅まで運ばれてきました。それを荷馬車に積み替え、建築現場まで運んだのが、宮田家です。

同じ家からの三世代渡り初め。この日は、徳島市内から料理人の方を呼びたくさんのお客様を接待したそうです。

●写真の裏を見ると、鉛筆で写っている方の名前が書いてありました。



旧穴吹橋の工費は、約33万円でした。　※旧穴吹橋ができた昭和3年の公務員の初任給は75円、カレーライスは10銭でした。

参考文献（週刊朝日編　値段の風俗誌　朝日新聞社）（週刊朝日編　続値段の風俗誌　朝日新聞社）

ひと・クローズアップ

『旧穴吹橋とともに』

美馬郡穴吹町　為行（ためゆき） 啓夫（けいお）さん

『ありがとう穴吹橋　長い間お世話になりました』平成4年12月25日。旧穴吹橋のお別れ会が橋のたもとで行われました。このお別れ会を地元のみなさんに呼びかけたのが、為行啓夫さんです。

為行さんは三好郡三加茂町の出身で、東京の大学を卒業後、先輩の経営する軍需工場で兵器類の設計をしていました。戦後は、食料事情により、農業が盛んになったことから、その工場でも農機具を製作していました。最初は、売れていた農機具も2、3年すると売れなくなり、先輩から、みんなそれぞれ故郷で農機具を販売してくれないかという話になりました。徳島に戻り、穴吹町の旧穴吹橋南詰めに農機具店を開業したのが昭和24年のことです。農機具は重く、船で川を渡ることができません。橋は、為行さんにとってどうしても必要なものでした。店はとても繁盛し、近隣の農家はもちろんのこと、北岸の農家も橋を渡って農機具を買いに来ました。また為行さんも配達に行きました。また農機具がなくなると、坂出までオート三輪をとばしたこともあったそうです。

★後ろに写る赤い橋は今の穴吹橋

どんな時も為行さんのそばには、旧穴吹橋がありました。老朽化の為、架け替えられることになり、撤去されることが決まったとき「この橋のおかげで今までやってこれたな」としみじみ思ったそうです。また隣に座っていた奥様が「本当によく使わせていただいた」とおっしゃいました。橋に対する深い感謝の念と愛情が伝わってきます。今は、息子さんに経営を任されましたが、俳句の会に参加するなど大忙しの毎日。今でも心の中には旧穴吹橋と吉野川の姿が生き続けています。

■ **取材の後、ふれあい橋についていただいた為行啓夫さんからのお便りです。**

西側にありました橋は、人と自転車専用で橋の幅は3メートル少々です。

名称は『ふれあい橋』と銘打ってありますが、一般には歩道橋と言われており、駅前筋にあった穴吹橋が100メートル位東側に移動しましたので、歩いている人又自転車の人達が大変不便なので、穴吹町、脇町の申し出により架設された橋です。

橋の途中まで行くと音楽が流れてくるようになっており、好きな人は立ち止まって聞き惚れている状況です。途中に休む場所あり、音楽を聞きながら一息ついております。

注…西側というのは、今の穴吹の西側のことをさす。

※誌面の都合で一部割愛させていただきました。

★旧穴吹橋のあった場所は、現在ふれあい橋となっています。

吉野川アラカルト

alacarte 特集

イサム・ノグチと吉野川

ひとりの芸術家を追って

阿波中央橋の両岸の入り口には、イサム・ノグチが制作した子供の像がちょこんとたたずむ。

吉野川市鴨島町と板野郡吉野町を結ぶ阿波中央橋。この橋の南岸と北岸に、男女のこどもの像があることをご存知ですか?これは、世界的な彫刻家であるイサム・ノグチの作品なのです。

イサム・ノグチは、仕事、プライベートを通じて、何度か徳島を訪問しています。

ときには、阿波おどりを見物したことも。20世紀を代表する芸術家であるイサム・ノグチとは?そして、徳島とのかかわりは?ひとりの芸術家と向かい合う旅がはじまります。

特集

吉野川とともに
舟大工 原 久夫さん

吉野川の風景と聞いて、カンドリ舟と吉野川の雄大さを思い浮かべる方も多いのでは。川面に浮かぶカンドリ舟は、吉野川の風物詩のひとつ。

カンドリ舟は貨物を運ぶ舟として、また、人々にとっても、鉄道や車が発達するまでは、移動をするための手段として利用されていました。まさに川は、今の道そのものだったのです。現在は、アユ漁をするための川漁船として作られています。このカンドリ舟を長年にわたって作っているのが、三好郡三野町の舟大工　原久夫さん（75）です。現在、カンドリ舟を製造しているのは原さんを含めて、2軒のみ。

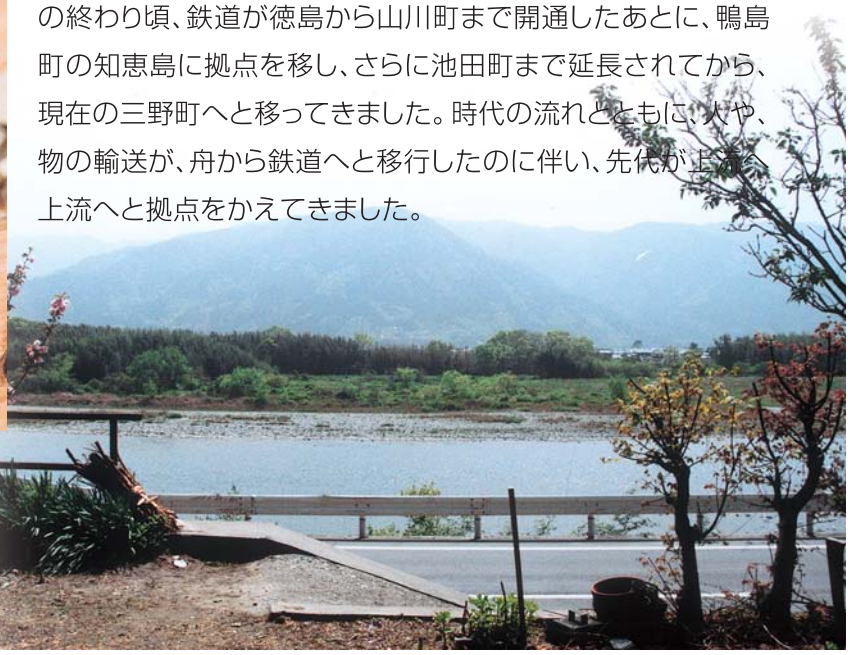
カンドリ舟は、昔からの吉野川の風景を伝える文化遺産。長年の伝統を守り、昔ながらの製法で作られているカンドリ舟。どのように作られているのか、どんな工夫がされているのか、三好郡三野町太刀野（たちの）の作業場を訪ねました。

※アユ釣りの解禁期間は、各河川によってそれぞれ異なりますが、吉野川のアユ釣りの解禁期間は6月1日～10月19日までと、11月11日～12月31日の年2回です。

原 久夫さん

代々伝えられてきた職人技

初めて訪ねた作業場。舟底や棚板などが完成し、舟の形ができつつありました。そこには、舟と向き合い作業をしている原さんの姿が。すぐには話しかけられないような、張りつめた空気が流れています。作業の手を休めると、穏やかなやさしい表情に。原さんは、物心がついたときから、父や祖父の作業を見て、手伝いながら育ってきました。家族といっても、師弟関係でもあります。作業に対する姿勢からはじまり、生活全般、舟をつくるにあたっての技術、心構えなど、すべてを教わってきました。この仕事に携わって60年以上。原さんで7代目。祖父の代には、徳島市の出来島で舟大工をしていました。明治の終わり頃、鉄道が徳島から山川町まで開通したあとに、鴨島町の知恵島に拠点を移し、さらに池田町まで延長されてから、現在の三野町へと移ってきました。時代の流れとともに、人や、物の輸送が、舟から鉄道へと移行したのに伴い、先代が下流から上流へと拠点をかえてきました。



作業場からみえる風景

「川ではカンドリ舟、陸では馬と牛がタクシー代わりだった」と原さん。多い時は、1年間に20隻～30隻ほど作っていましたが、今では年間に2、3隻を作る程度になりました。現在では、舟にはグラスファイバー製のものもあり、価格も木で作られたものよりも安いのですが、川面の上での安定感や操作感は、木からできた舟の方が、大変よいそうです。今も使っているノコギリや、カナヅチのなかには、原さんの父や、祖父、曾祖父の使っていたものが多くあります。明治の頃に使っていたものが平成になっても現役として使える。魂と心意気が込められた道具たちです。

お伺いしたときは、ちょうど「摺(す)り合わせ」という作業の真っ最中でした。「摺り合わせ」とは、舟の中に水が入ってこないように、木と木の継ぎ目にノコギリをあてる大切な作業です。ノコギリの刃の跡を残さないように木の継ぎ目すべてに「摺り合わせ」を行います。2回よりも3回。失敗は許されない大切な行程のひとつ。すべてが細やかな作業の積み重ねで成り立っています。

原さんの手。今までの日々の技術の積み重ねを語っています。

▲摺り合わせ。精神力が要求される行程のひとつ。

▲「吉野川は生活をするための川。田畑と一緒でよ」と語る原さん。

舟を作るときは原木からつくります。いざ、作りはじめて、木の持つ性質、たとえば、やわらかい、かたい、ねばいなどが分かります。この木の性格に合わせて釘の打ち方、舟のカーブの付け方、曲げ方などが、すべて変わってきます。棚板には、幅が広くて長い材質が必要なので、木が軽くて使いやすいスギを。舳先（へさき）や艫（とも）、カジキ、ヘリには材質がしまっていて、ねばい（釘がとまりやすい）ヒノキ、底板にはスギ、ヒノキ、ツガを使っています。「相手は水。水が知っとうけん、手抜きはできんよ」と原さん。60年たっても初心を忘れることなく、全身全霊をこめて1隻の舟がつくられています。

▲ 一枚の板からはじまって、カンドリ舟が完成する。

▲ それぞれ用途に応じた木を使う。

後世に伝える

舟釘を木の性質にあわせてうっていく。

原さんとお話をしていると、先代から受け継いできた作業への姿勢の話から始まって、今の社会情勢の話、子どもの教育についてなど、次から次へと話題が広がっていきます。息子さんやお孫さんもいらっしゃいますが、後を継いでほしいとは思っていません。「舟の需要も少なぁなってきたし、厳しい。釘もなくなってきようし」原さんの心配は、舟を作るための舟釘をつくる職人がいなくなり、手持ちの舟釘が、残り少なくなってきている事です。原さんが釘をうつと、まっすぐでもカーブがある部分でも、力加減や技術により、ちょうどいいようにしっかりと止まり、抜く時もスムーズにいくのです。まさに自由自在。原さんの魔法の技です。舟釘がなくなれば廃業を考えています。一般的な釘では舟を作ることはできません。しかし、原さんには文化遺産であるカンドリ舟を、後世の人たちにも伝えていきたいという気持ちがあります。舟釘を作る職人が廃業した6年前には、カンドリ舟の将来を心配し、徳島県立博物館にカンドリ舟を寄贈しました。現在、常設展示室のエントランスホールに展示され、訪れる人の目を楽しませています。特に釣りをされる方々は入り口で立ち止まり、興味津々でみているそうです。

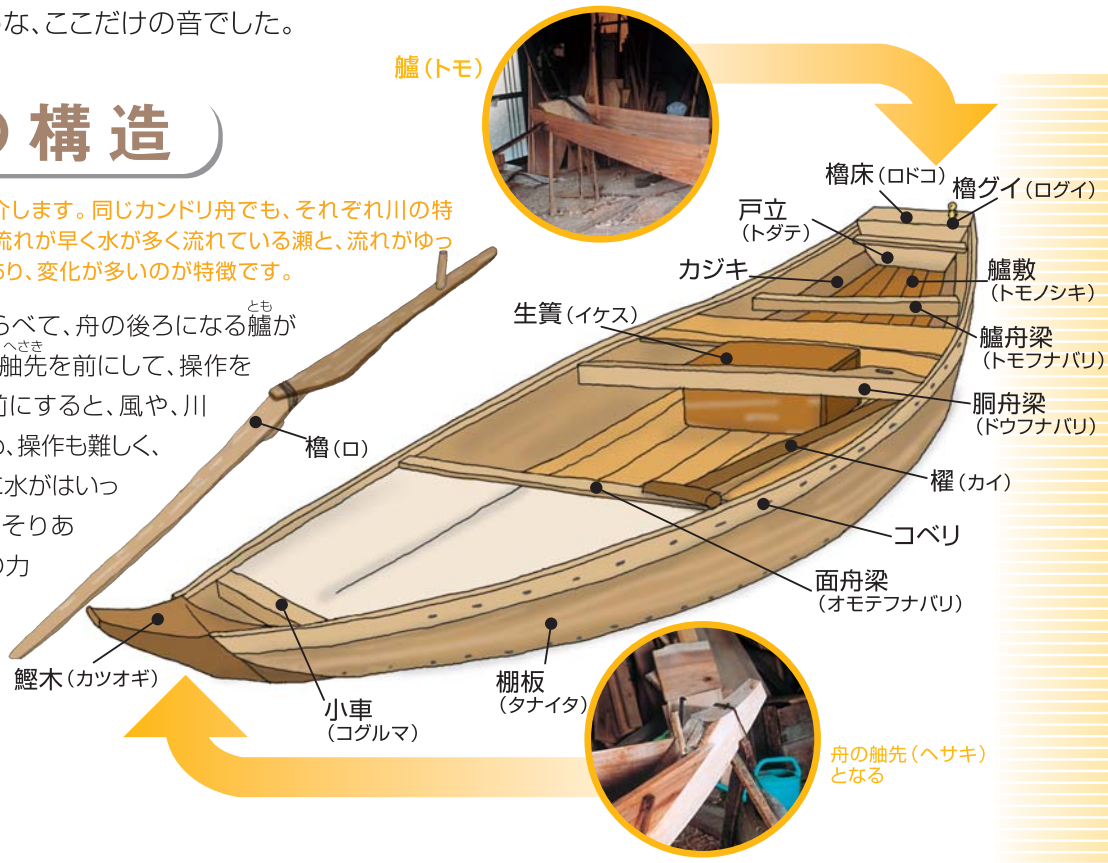
国土交通省徳島工事事務所でも、吉野川からうまれたカンドリ舟を後世にも伝えていこうと、7月下旬から石井河川防災ステーション・吉野川情報館で展示する予定です。

帰り際、吉野川や周りの山々には、原さんの作業場からこだまするカーン、カーンといった音が聞こえてきました。いつまでもいつまでも聞いていたいような、ここだけの音でした。

カンドリ舟の構造

ここでは、カンドリ舟の構造について紹介します。同じカンドリ舟でも、それぞれ川の特徴にあわせて作りが違います。吉野川は流れが早く水が多く流れている瀬と、流れがゆっくりと静かな瀞場（とろば）の繰り返し。高低差もあり、変化が多いのが特徴です。

吉野川のカンドリ舟は他の舟にくらべて、舟の後ろになる艫（とも）が高くそり上がっています。一般的には舳先（へさき）を前にして、操作をするのですが、吉野川では、舳先を前にすると、風や、川の流れをうけやすくなります。このため、操作も難しく、方向性がとりにくくなります。また舟に水がはいってしまいます。その点、高く大きくそりあがった艫を前方に進んでいくと、風の力や川の流れも分散し、安定した操作をすることができるのです。このように、吉野川のさまざまな特徴をとらえてカンドリ舟は作り続けられてきたのです。



吉野川アラカルト

alacarte 特集

川湊ものがたり

池田町川崎の川湊跡。祖谷街道を背景に発展した。

水運が移動の主要な手段であった頃、川を渡る渡し船と、主にモノを運ぶために使われていた平田船が、吉野川を行き交っていました。この平田船などが大量の物資を運ぶために、大きな船が出入りするのが川湊です。人々の流れも多く、湊には、旅館や商店が並び、産業も栄えるなど活気にあふれていました。川湊には、それぞれのエピソードや役割があります。今回、特集でお届けするのは吉野川上流の池田や山城の川湊。池田町文化財保護審議委員の大岩義雄さん、池田町教育委員会生涯学習課の山下裕士さん、いけだコスモスの会仲村マサミさんに案内していただきました。今回はどんな発見があるのでしょうか。

明治の終わりか大正の始め頃。千五百川原で相撲をとっているようす。土俵が用意され多くの人々が見学にきています。祭りの日と思われます。〈池田公民館所蔵〉

現在の千五百川原。

千五百川原

まず訪れたのが、池田町の千五百川原。千五百というのは、面積が千五百坪であるとか、ここに船に乗せて運ぶ荷物が千五百個置けたから、また、昔、戦(いくさ)があり、千五百人の方が亡くなったからなど、様々な説が伝えられています。千五百川原には「はまの港」があり、上り下りの船や多くの人々で大正時代までにぎわっていました。池田町の諏訪公園内には諏訪神社があり、神社から千五百川原に続く長い階段を降りたところに灯台（常夜灯）が残っています。諏訪神社の境内には船の神様である金比羅大権現が祀られていました。多くの人々が、船の運航の安全祈願や、無事、到着したことを感謝していたのでしょう。船での移動が当時の一番早い方法とはいえ、流れの早い瀬も多く、暴れ川であった吉野川での船の運航は、事故と背中合わせでした。当時、船の行き来は昼夜をとわずあり、夜の灯りは、港の位置を表す大切なものでした。灯台の高さは、約４mで「光蘩（こうけい）」という文字が刻まれています。暗闇の中、輝く光は船頭たちにとって明るい希望をもたらすものだったにちがいありません。

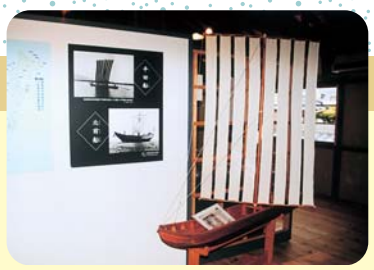
写真向かって右から
山下裕士さん、大岩義雄さん、仲村マサミさん。

〈池田公民館所蔵〉

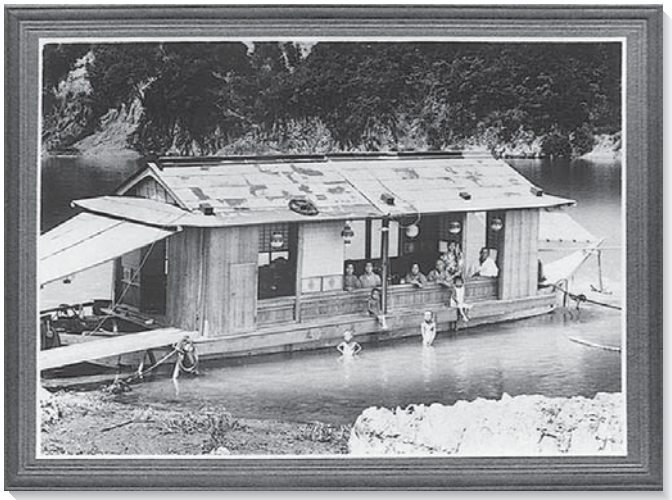
ちょっと出かけてみませんか　★たばこ資料館★

三好郡の産業を語るのにかかせないたばこ。ここでは、たばこ産業の発展と歴史を様々な角度から紹介しています。たばこなどを積んでいた、平田船の帆と模型も展示されています。平田船の帆は大きくて重いので帆袋に入れて丸めて置かれています。

阿波池田うだつの家・阿波池田たばこ資料館　TEL:0883−72−3450



川湊ものがたり



役割を終えた平田船を改造して作られた屋形船。この屋形船は昭和初期まで池田の観光事業として多くの貢献をし、四国各地や京阪神からの観光客でにぎわいました。〈池田公民館所蔵〉

大岩さんのお話によると、白地の川湊があったところと思われる。

白地の常夜灯

白地の八幡神社の登り口にある常夜灯。もともとは白地の川湊の灯台でした。白地の川湊にあったものを、池田ダムを建設するにあたり、白地中組の人たちが昭和48年9月に移設したもの。安政6年（1859）の建立。世話人の7人の名前が刻まれています。

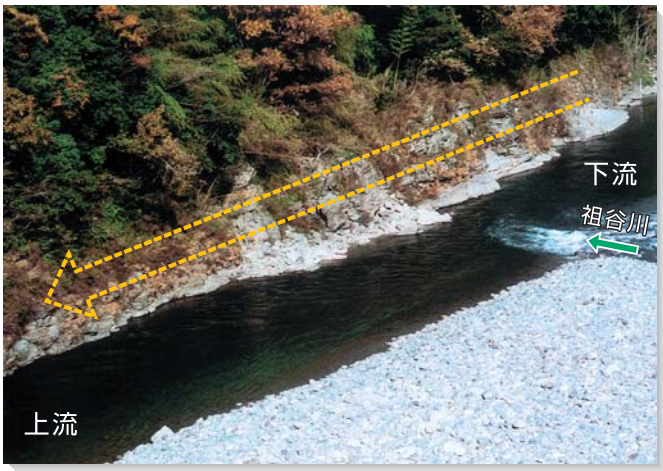
四国のへそ

次にたずねたのは、池田町白地（はくち）の浜です。ここは四国の真ん中。北へ行けば讃岐へ、南には土佐へと続く山々が、そして西には伊予へと続く伊予街道が通っています。白地は県境の近くで、白地船渡番所があり、国を守るという意味においても重要な役割をはたしていました。（昔は現在のように県境を自由に行ったり来たりすることはできませんでした。県＝国だったので、県を超えるということは、国境を超えるということであり、重要な情報などが流出しないように、また不審な人物が入国しないようになど、番所で警備をする必要がありました。）大岩さんのお話によると池田士（池田にいた五つの家の武士の事）がずっと詰めていたそうです。それほど重要な場所だったのです。

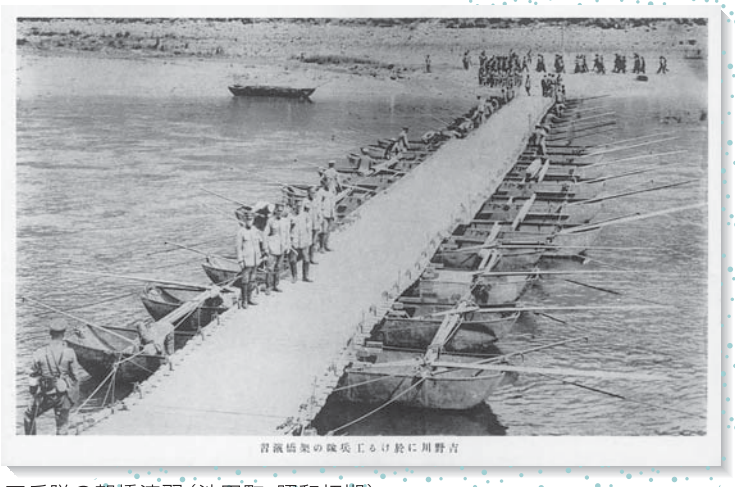
また、池田の佐野は国境なので、御分所一所（ごぶんしょいっしょ）（物資の税を徴収するところ）と番所がありました。

上流の川湊跡

さらに上流へ。池田町川崎の川湊跡と、吉野川の最上流の川湊である山城町川口の浜へいきました。川崎の川湊は祖谷街道を背景として栄え、楮（こうぞ）や炭、たきぎなどを運んでいました。中でも川崎の久蔵（きゅうぞう）の炭は有名で徳島藩を代表する炭だったそうです。川口の浜は山城町役場の目の前を流れるあたりです。それにしてもどちらの川湊も急な流れが続くところ。池田－川口間の運航は1754年か、



川崎の川湊跡。当時、下流から上流へ船で移動するさい、船体を引っ張るのに使っていた道。風のない時や瀬が多いところではこのような手段がとられていた。



工兵隊の架橋演習（池田町・昭和初期）
善通寺師団の兵士が船を土台に吉野川の大具渡船場で渡河演習を行っているところ。善通寺工兵隊第十一大隊は、昭和9年の池田町の大火災の時に、消火につとめたことでよく知られている。〈池田公民館所蔵〉

1755年頃、池田の船頭が急な流れの中、危険を冒して、池田から川口までの平田船の運航に成功したことから始まったそうです。

上流からは、木材、たきぎ、木炭、煙草（たばこ）、楮、まゆ、しゅろ、みつまた、酒などを下流に運び、また下流からは米、塩、わかめ、いりこ、干し魚、瀬戸物、綿布類、日用品、雑貨品などを運んできていました。こういったことからも分かるように、上流にしかないものを下流に、下流にしかないものを上流へと運んでいたわけです。

船には2,3人が乗り込み、池田から徳島市までの下りは3日間程度。徳島から池田までの上りには、1～2週間もの日数がかかっていました。風のない時や瀬が多いところでは、船を引っ張り、上流へと向かっていました。川崎や川口の川の脇には、当時の人々が船を引っ張る時に歩いていた道も残っています。多くの危険を伴いながらも、生活のために船を前へ前へとすすめていたのです。

当時は船を一隻持っていると、水田一町分に匹敵するといわれていました。最盛期は鉄道が川田村船戸まで開通した明治33年（1900）頃までで、大正3年（1914）に池田まで延長されると、だんだんと移動の手段が水運から陸上へと推移し、大正5年（1916）には、その姿を消しました。

～吉野川 出会い・発見～

岩津の渡し

「この灯籠は、私の先祖が、一部寄付しとんでよ」とお話してくださったのが、加川健治さんです。吉野川中流域の岩津は大きな川湊・渡し場として栄えていました。ここには、今でも灯籠があり、旅館が川のすぐ近くにあって、川湊があった頃の風情ある町並みが残っています。慶長時代（1596～1615）に岩津の川湊を灯すために2両の寄付をされているそうで、他の方々と一緒に灯籠に、ご先祖の名前が書かれています。自分が生まれ育った町を「情緒があっていいところでしょう」とお話される加川さん。偶然の出会いで思いがけず川湊の話を聞くことができました。

加川健治さん。ご自宅のすぐ目の前に吉野川が流れている。

岩津の灯籠

人形浄瑠璃と吉野川

四国大学文学部教授
大和　武生さん

専門は日本文化史、思想史、博物館学。著書に「阿波人形浄瑠璃」「阿波・近世文化の諸相」など。分かりやすく丁寧に阿波と人形浄瑠璃のつながりについて教えてくださった。

「人形浄瑠璃は吉野川流域に発展した藍が育てた芸能といえます。」とまず始めにお話してくださった大和さん。阿波の国と、人形浄瑠璃のつながりは約400年前まで遡ります。阿波国の最初の大名、蜂須賀家政公は豊臣家の家臣でした。関ヶ原の戦い（1600年）の際に家政は豊臣側に参戦を要請されましたが、家政は大名の立場を捨て阿波の領土を返上し、参戦せず、家政の息子である至鎮（よししげ）は徳川側で戦いました。（この時に家政は出家）この功労から蜂須賀至鎮は、徳川家から阿波大名に命ぜられたのです。

豊臣家が徳川家康により滅亡させられた大阪冬の陣・夏の陣（1614年・1615年）で、蜂須賀至鎮が徳川家に参戦し、再び大きな功績をあげたことから阿波本土の領土の上に現在の淡路島を加えて与えられ、阿波藩となりました。

淡路島が阿波藩に編入されたことも、人形浄瑠璃の発展のきっかけとなりました。兵庫県の西宮神社と広田神社とは姉妹神社でした。そして広田神社の荘園が淡路島にあり、神社のお札を売るのに、淡路島の農民が従事していました。西宮神社は漁業の神様なので「おいべっさんが鯛釣った」といいながら祭神のえびす神が鯛を釣る様子を人形で表現しました。浄瑠璃の語りと人形を合わせるときに、お札売りをしていた淡路島の農民たちに人形を遣わせてみようということで浄瑠璃芝居は成り立ちました。その後、阿波藩主蜂須賀至鎮は、この淡路島の人形遣いの農民たちを特別な身分※「道薫坊廻百姓」にしました。当時は今の時代のように自由にどこにでも国境（現在の都道府県）を越えて旅することはできませんでしたが「道薫坊廻百姓」達は、自由に国を超えて興行する許可をもらい、全国各地で人形芝居興行をし、西日本を中心に人形浄瑠璃を広めました。大阪には竹本座、豊竹座といった有名な人形座がありましたが、そこで発達させた人形の技術を淡路の人形座が全国に拡める役割を果たしました。

各地を巡業すると人形が痛んでしまいます。この淡路島の人形遣いたちを支えたのが、当時、徳島の国府を中心に数多くいた人形師（人形を作る人）たちです。

興行の時以外にも人形を遣って練習をしなくてはならない。そのためには、人形を作る人たちが必要でした。阿波に住む人たちが全国に人形をひろげ、人形遣いを支えるために人形師が数多くうまれ多くの人形を作っていったのです。その土壌は今でも受け継がれています。

こうした背景からも江戸時代には、阿波の国に多くの人形座が生まれました。こういった人形座の公演を支えていたのが藍がもたらした経済力でした。他国でも藍の栽培は行われていましたが、商業藍としての良質藍は、徳島が全国の90％以上という驚異的なシェアを誇っていました。

藍が栽培されていた吉野川流域では、藍商人達が藍作に従事している農民達の慰労として、淡路島からプロの人形座を有料で招き、広場や収穫後の田園に、臨時の小屋がけで浄瑠璃の公演を行っていました。定期的に行うので、同じ演目では飽きてしまいます。そこで、人気のある演目を色々と見せることになりました。さまざまな要素が重なり、藍の発展が浄瑠璃の発展ともつながったのです。

「もしも、吉野川がもたらした肥沃な土壌がなければ、藍作も発達しなかったでしょう。藍がなければ阿波の人形浄瑠璃の背景もずいぶんちがったものになっていたにちがいありません」というお話が印象的でした。

※道薫坊（どうくんぼう）・・・木偶（でこ人形）のこと

特集

田中家を訪ねて

名西郡石井町藍畑にある田中家。

初代播磨屋与右衛門が、寛永頃（1624～43）に入植して以来、代々続いた藍商の家です。大正初期までは、ここで藍玉（藍の染料）を作っていました。

表門をくぐると、広い庭。そしてカヤ葺き屋根の美しい主屋が見えます。その主屋を取り囲むように、土蔵や藍納屋などが建てられています。以前、この屋敷はもう少し北側にありました。洪水の多いこの土地では、たびたび浸水したりと、洪水の被害を受けたため、安政初年（1853）より、現在の土地への屋敷の建設が始まりました。安政6年（1859）の宝庫完成にはじまり、明治20年（1887）までの間に、なんと30年もの年月をかけて、11棟の建物が作られました。これらはすべて、昭和51年に国指定の重要文化財に指定されました。その後、昭和52年から4年間にわたって修理が行われています。

国指定の重要文化財の民家は、全国に多数あるそうですが、11棟すべてが文化財に指定されているのは、民家としては田中家だけだそうです。その建物を見せていただきながら、今もこの家に住み、守り続ける田中靖子さんに、当時の藍商の暮らしや、洪水から家を守るための建物の工夫等を、じっくりと伺いました。

洪水から家を守る

田中家は、屋敷全体の地盤が高く作られています。徳島県産の青石や、鳴門の撫養石で作られた石垣の上に、門、主屋、納屋、土蔵などを配置し、石垣は隙間なく積み上げられています。石垣の高さ3分の1ぐらいは、土に埋まっており、より強固な作りとなっています。洪水の勢いが大きい場所の石垣をより高く築いていました。これは、高い石垣に水が当たって、その流れや勢いを緩やかにするためです。また、藍納屋の前に吊りさげられている平型船は、洪水時の連絡や、移動に使ったものです。また、今までに使ったことはないそうですが、よく見ると カヤ葺き屋根に、鉄のクイが一本出ています。これは、梯子をかけるためのものです。大規模な洪水時は、屋根ごと船となり、避難できるようになっていました。

洪水用の平型船。
洪水時の避難に使われた。

多くの費用をかけ、30年の歳月をついやして作られた屋敷、そして石垣。吉野川の洪水の大きさと、当時の藍商人の富裕さを物語っています。

小さいお城のように見えることから、「城構えの家」とも呼ばれる。だんだんと石垣が高くなっているのが分かる。

藍商の家

明治30年代に入って、ドイツから合成染料が輸入されるまで、徳島県では藍が盛んに作られ、大正初期まで田中家の広い庭では、70人もの人が作業をしていました。夏に藍を刈り、干して乾燥させ、葉藍にし、藍納屋で発酵させ、すくも（藍の染料）とし、杵で叩いてつぶし、藍玉としていました。夏場の作業は重労働。日の出から、夜遅くまで仕事が続きます。みそ汁、たくわん、ご飯、梅干し、さつまいもなどを食べながらの作業となりました。

↑藍を取り入れて乾燥させ、この藍納屋に山のように積み上げ、下からかき回しながら発酵させ、染料にする。

田中家には、藍を収穫し、染料にするためのさまざまな道具が残っている。

また、食事を作る女性たちは、化粧をする暇もなく忙しい毎日を送っていました。そこで、台所や、家の中から出て、出入りの人たちと会う時は、壁に打ち付けられた小さな棚の上に、手鏡を載せて、仕事の合間のわずかな時間に、紅をひいたり、髪を整えたりしました。女性らしさを感じさせるものが残っています。

しかし、こうした忙しい中にも、お正月は働く人々にとって楽しみでした。新しい年を迎える前には、朝3時から多くの人がやってきて、一石以上のお餅をついたといいます。また、赤飯、みそ汁、お寿司等のごちそうを美味しく食べ、近所の人もやってきて、楽しい時間を過ごしました。

こうして作られた藍玉は、田中家の前を流れていた川から、吉野川、瀬戸内海を経て、豊後水道へと入り、豊後の国（大分県）へと出荷されていました。

商家の趣が残る、田中家の内部。

イギリスから輸入された煉瓦。

ここに手鏡を載せて、女性たちは仕事の合間に化粧をした。

イギリスのアンソニアという会社の時計。明治初期に田中家にやってきた。徳島県では第一号。

暑い時、来客用に使っていたうちわ。

藍を作る職人は、この法被を着ていた。

歴史を伝える

今回、丁寧に案内してくださった田中靖子さん。たおやかな笑顔が印象的な、美しい言葉を話される方です。「人間同士の交流があるあたたかい文化財にしたい」と田中さんはいいます。全国からやってくるお客様との出会いを楽しみにしている田中さん。しかし、もともとこの役割は今は亡きご主人のものでした。それをいま、奥様の靖子さんが引き継いでいるのです。最近では、息子さんのお嫁さんも、説明を始めました。

藍商田中家の歴史は、脈々と語り継がれています。

丁寧に説明してくださった田中靖子さん。

積荷（藍玉）の船に載せ、九州より購入したと伝えられている螺鈿（らでん）や水晶があしらわれた贅沢なつくりの屏風。

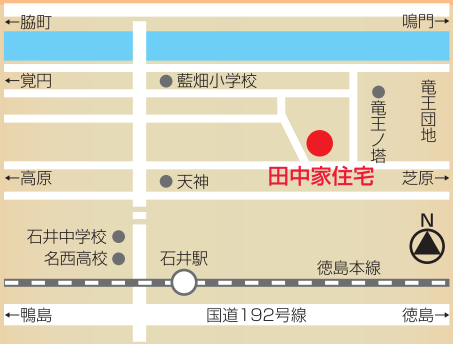
大正時代の人形。

明治時代のオルガン。今も音が出る。

田中家見学について

見学料

大人500円（説明不要300円）	高校生400円（説明不要300円）	子供200円（説明不要　無料）

現在見学は、日曜と祝日のみ。その他お問い合わせは、
徳島県名西郡石井町藍畑 TEL:088-674-0707 田中家住宅まで

周辺ノ地図